

# 教区だより

2017

1月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

第338号



2 3

特集

## 「拾学舎」

～教区親鸞聖人御誕生八百五十年お待ち受け事業～

4

ざっぽう  
雑宝



～私を歩ませた言葉～

【筆者】 因伯組 浄福寺 坊守  
こたに なおみ  
小谷 尚美 氏

5

連載

## 大乘仏教一釈尊観の深化<sup>しんか</sup>

《第9回》 仏伝經典から大乘經典へ

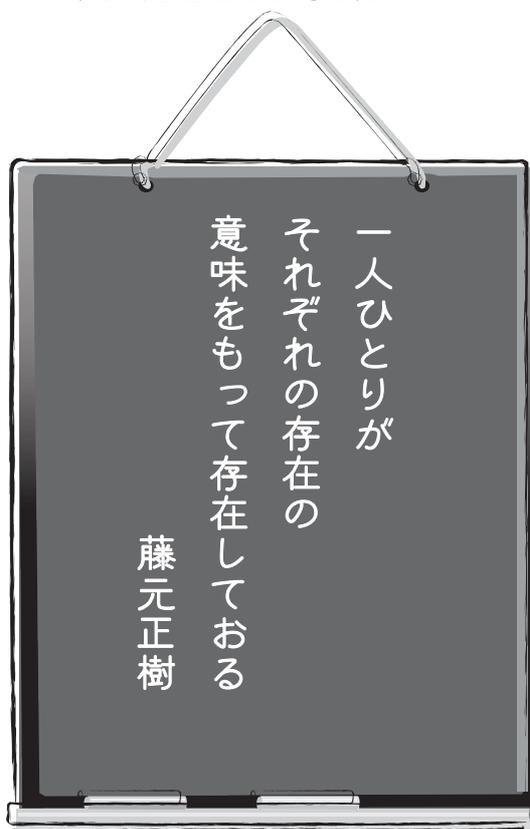
おだ あきひろ  
織田 顕祐 氏

6

京都教区の動き

7

京都教区教化レポート（児童教化連盟）



— 教区親鸞聖人御誕生八百五十年お待ち受け事業 —

## 特集

# 拾学舎

教区親鸞聖人御誕生八百五十年お待ち受け事業として、育成員等研修小委員会が取り組んでいる「拾学舎」を特集します。

「拾学舎」は兼職などの事情により、普段教区などで開催される平日の研修会に参加できない方にも参加していただけるよう、土曜日の午後で開催しています。

【近江第二十五西組 長順寺 河原 真さん】

①私は小さな寺の長男として生まれ、将来は住職を継ぐという漠然とした思いを持ちながらも、真宗について本格的な学びをすることもなく、仕事にも追われ学ぶ場も見つかりませんでした。

今回、住職である父の勧めにより、この拾学舎に参加させてもらうことで、私と同じように真宗を基本から学ぼうとされている方々と共に学ばせていただければと思います、参加を申し込ませていただきました。

②私と同じように仕事や家庭を持ちながら参加されている方がたくさんおられて、勇気づけられた部分がありました。また反面、その方々が熱心に聴聞されていたり、積極的に他の聞法の場合に出ていって知られることを知って、自分自身の姿勢を考えさせられる機会にもなりました。

③私共受講生の他にも、毎回多数の聴講生が参加されていることに驚きました。聴講生の方の中にも、若い方や女性の方、在家の方などいろんな方がおられて、皆さんが先生のお話を楽しみ聞いておられるのを見て、真宗を学びたいと思っている方が多い事を感じました。

また、閉会後の懇談会では講師の先生を囲んで、和やかな雰囲気の中で親しく会話させていただき、とても貴重な経験ができました。

④私のように真宗を学ぶ機会が少なく、またどのようにして学ぶかを悩んでおられる方はたくさんおられると思います。そのような方にとって、この拾学舎は真宗を学び始めようと考えてる人の聴聞の第一歩となる非常に良い機会になると思います。

今後この目的に沿ってさらに多くの方にこのような場に参加できる機会を与えていただき、真宗に出遇うきっかけを与えていただければ嬉しいと思います。

【近江第二十六組 西廣寺 武田 由香利さん】

①真宗を一から学ぶに当たり、仏道の入門書といわれる書籍を紐解いてみるものの、その掴みどころのない内容に、八方塞がりの状態であり

現在十二名が受講生として一期二年の研修に参加され、お互いに意見を交わして学びを進めています。拾学舎を通して初めて研修会に参加された三人の方に、次の四つの質問をしました。

- ①参加のきっかけは？
- ②参加してみてどうでしたか？
- ③参加して驚いたことはありましたか？
- ④今後への要望をお聞かせください。

ました。「さて、いかにすべきか。全く手に負えない」。そんな矢先のお誘いに、「何か掴めるのではないか」と藁にもすがる思いで思い切つて飛び込んでみました。

②自身とは遥かにレベルの違う方々の中に混ざっていたので学習でした。しかし、わからないうなりにも半ば強制的に身を置いたことは、今後学んでいくべき方向性を見出す道標となつた気がいたします。

今回の学習は、初めの一步を踏み出すきっかけとなりました。思い切つて参加して良かったと思っています。

③「師」と名のつく立場の方であっても常に学び続けているということに、改めて驚かされました。このことから、『答えのない問い』という言葉の意味合いがわかった気がいたします。

④当講座を受講する前の事前講座的な位置づけとして、更に基本的なことを学ばせてもらえる場があるのであれば、ぜひ参加させていたいただきたいと思ひます。

私のように、初めの一步をどのように踏み出すべきか迷っておられる方は多いのではないのでしょうか。垣根が高く感じられて、参加をためらっている方も沢山おられると思ひます。これ

から学んでいく全体像からご教示くださるような機会があれば、おぼろげながらも自分の現在の立ち位置が見えて、気負い無く、よりスムーズに入つていけるような気がいたします。

【山城第四組 光照寺 大村 泰基さん】

①普段は会社勤めをしているため、なかなか平日の研修会に参加しづらく、土曜日に開催されるといふことで参加しました。

②宗門の関係校にも通つておらず、教師検定試験も教区の事前学習会に参加しただけですので、ついでいくのに精一杯です。

③一人で学んでいると正しく進んでいるか不安になりますが、学ぶ仲間がいるといろいろと確認ができたり、発見があつて、楽しく学ぶことができます。

④日程的に難しいとは思ひますが、土日に基本的な学習会を開催していただきたいです。

三名の方の言葉を受けて、「拾学舎」を運営する育成員等研修小委員会主査より、一言いただきました。

拾学舎の内容は「教行信証」講読（講師・藤嶽明信大谷大学教授）と声明作法の学び（講師・泉康夫本山堂衆、野間顕本山堂衆）になります。三名の方の声にも表れています。第一期十二名の受講者の姿勢は、意欲的かつ真剣です。そのことにこの場が待たれていたのだと感じています。その第一期拾学舎も残すところ後一回となり、来年度は第二期の受講者の募集を予定しています。新たな「学びの仲間」の参加をお待ちしています。

【育成員等研修小委員会主査 藤浪 遊】



# 雑宝



因伯組 淨福寺 坊守

小谷 尚美

「なんまんだーなんまんだー」

私の祖母は『なんまんだー婆ちゃん』だった。一日中いつでもどこでも、「なんまんだーなんまんだー」。腰を下ろす時も、「なんまんだー、アーどっこいしょ」という具合だった。

お婆ちゃん子だった私は、幼い頃はよく祖母と一緒にいた。一緒に歌をうたい、針に糸を通すの手伝い、一緒にお夕事を勤め、そして祖母の「なんまんだー」を何度となく聞いて育った。

やがて、私は成長するにつれ家に居る時間が少なくなり、大好きな祖母とも交わす会話は少なくなった。その間に祖母は次第に弱っていき、抱える病気も増え、日々飲む薬は増えていった。そして余程しんどかったのか、「私ももうすぐ終わるなあ」と言うようになった。私は祖母が弱気になって

いると思えば悲しかった。じきに迎える米寿のお祝いを、と考えていた頃、いつものように

「私ももうすぐ終わるなあ」と言う祖母。私はたまたま、

「そんな弱気なこと言わんで。元気出して」と励ました。すると祖母はこう言った。

「なー(私のこと)や、『死』という字はなあ、『一つのタビ(旅)』と書くんや。お浄土に一つの旅をさせていただくんや。有難いなあ。なんまんだーなんまんだー」

私は、祖母を励ました自分が恥ずかしくなった。祖母の言う「もうすぐ終わる」は決して「弱気」ではなかった。自分のはからいを超えた身の事実をありのまま受け入れ、語っているだけであった。お任せのままに「生」に区切りをつけ、続く「死」をも享受する、祖母のお念仏だった。そして祖母は、自分で感じていた通り、米寿を迎えず還浄した。

祖母が遺してくれたお念仏とは何なのか。結婚後、覚束なくもそのおいわれを聞く歩みが始まった。繰り返し読ませて頂いた本の中で気付かされたのは、自分が多くは念仏ではなく、念自我をしていたということ。そして胸を突いたのは、『お恥ずかしい』を通さないで『ありがたい』というのは、都合のいいようになったというだけのことが多い」という文言だ。

ある夏の日、二歳を目前に控えた次女が高熱に襲われた。三日たっても四日たっても熱が下がらず、ぐったりする娘の前に、私はさすがの思いで「なんまんだぶ」を称えずにはいられなかった。それは突き詰めれば「私を苦しみの生き地獄から解放してほしい」の念自我だった。分かつちやいるけど…だった。娘はその後入院し、原因が分かり治療を開始したことで、ようやく七日目にして高熱から解放され、十日後に退院した。

念仏の上で生活したいと思っても、逆転し、生活の上で念仏し、阿弥陀様をわし掴みにしていることにハッとする日々。そんなお粗末な私を、諸仏となりお浄土を旅する祖母が、苦笑しながらいつも案じて下さっている。



今回はジャータカ物語が仏伝經典に展開していくことを述べました。両者の共通する点は歴史的な存在としてのブツダ釈尊を顕彰あるいは表現するに当たって、無限の過去から物語を始めていることです。この無限の過去から始まる物語を、我々の通常の時間・空間から全く離れているという意味で「超歴史」と呼んだ先輩がいます。その言葉を借りて言い直すならば、無限の過去から始まる釈尊の伝記とは、歴史的な出来事（釈尊という存在）をとおして超歴史的な仏の世界を表したものであると言えるでしょう。

この点は、ブツダ釈尊に限ったことでもありません。例えば、今日は昨日によって成り立ち、昨日はその前日によって成り立ち、その前は、その前は…と遡<sup>さかのぼ</sup>っていけば、無限の過去によって今日が成り立っているのです。よく考えてみれば私たち自身も、自我の芽生えを超えて、母からの誕生を超えて、無限の過去からの命を生きているのではないでしょう。つまり、私たちは本来、超歴史的な存在であるにもかかわらず、それを自我の心によって小さな、小さな存在として考えていることに他なりません。

ジャータカ物語が無数に生まれたのは、この超歴史的なブツダの存在をなんとか表現しようとした結果のように思われます。そうした数多くのジャータカ物語をまとめた經典として『六度集経』<sup>ろくどじゅうきやう</sup>という經典があります。非常に古い經典で読みにくい漢文によって書かれています。初期のジャータカ物語を編集したものです。この經典は数多くのジャータカを六度、つまり布施・戒・忍辱・精進・禅・明<sup>みょう</sup>（智慧）の六項目によって整理しているのです。そのうち最も数が多いのは、主人公がその命を投げ出すという「布施」をテーマにした物語です。また、最も古い仏伝經典では、菩薩の修行を完成した釈尊が、兜率天<sup>とそくてん</sup>から地上に下生する時の場面を、「その時菩薩はすでに六度を完成して、下生してブツダとなるために生まれる場所を探した」と記しています。

のちに大乘經典として『般若経』が登場し、六波羅蜜を實踐することが菩薩の行であると説くこととなりますが、この釈尊が超歴史的な意味で功德を積み重ねた物語を、現在の菩薩の課題として位置づけなおしたものができそうです。

第一回目からコツコツと地ならしのようなことを書いてきましたが、ほぼ大乘經典を明らかにするために必要なことが整理できたのではないかと思います。ブツダの入滅という悲劇的な出来事を通して、歴史を超えた「法」とは何か、「仏」とは何かを探求してきた弟子の歩みがこうした超歴史的な世界を開いたと言えるのです。その過程で登場した「菩薩」という概念は、初めは過去の釈尊を指す固有名詞でした。しかし、本来、超歴史的な課題の中から生まれた概念ですから、次第に歴史的な釈尊という軀<sup>くわい</sup>を離れて、普遍的な意味を持ったものとして使われるようになります。こうした普遍的な菩薩と仏の世界を説くものが「大乘經典」と総称されるのです。

## 京都教区の動き

### 常磐会館報恩講

十一月二十一日(月)、京都教区常磐会館において報恩講が厳修され、遠近各地より百三十名を超える方々にご参詣いただきました。

勤行に続いての法話では、一樂眞氏(大谷大学教授)をご講師としてお迎えし、「念仏もうす生活」の講題にてお話しいただきました。講師の熱のこもったお話に、参詣の皆さんは熱心に聞き入っておられました。

ご法話の後のお斎では、今年は丹波第二組のご門徒方よりぜんざいのご接待がありました。温かいぜんざいをいただきながら、参詣者同士で和やかに語り合いました。

(駐在教導 梅溪)



### 報恩講コンサート

十一月二十七日(日) 十一時三〇分より、真宗本廟視聴覚ホールにて、御正忌報恩講コンサートが開催された。あいにくの朝からの雨、休日にもかかわらず聴衆は昨年よりも少なかった。

京都教区合唱団は六年連続の出演、三十三名が舞台に立った。指揮・栗原孝夫先生、ピアノ・大島寛子先生、ソプラノソロ・大島知子先生、仏教讃歌五曲を熱唱し、会場を魅了した。ただ、団員の減少が気になるところ、皆様のご入団を心よりお待ちしております。



(京都教区合唱団団長 村上宗博)

### ハンセン病問題に関する研修会

十一月三十日(水)、教区会館において、京都教区ハンセン懇主催の研修会が開催された。

今年にはハンセン病元患者の家族が国に対して裁判を起こした年である。その原告団副団長である黄光男<sup>ワウクワン</sup>さんを講師に迎え、「ハンセン病家族訴訟に学ぶ」をテーマに学ばれた。家族とは何かを改めて考え、その家族を奪っているのは誰であるのかを一人一人がしっかりと考えることの出来た研修会だった。

(教区ハンセン懇委員 若林朋子)

### 各別院報恩講

京都教区内の各別院において、報恩講が左記のとおり厳修されました。

- ・山科別院 九月二十四日～二十五日 講師・藤原正寿氏(大谷大学准教授)
- ・大津別院 十月十四日～十五日 講師・沙加戸弘氏(大谷大学名誉教授)
- ・岡崎別院 十月二十三日 講師・真城義麿氏(四国教区善照寺)
- ・赤野井別院 十月二十六日～二十八日 講師・長田浩昭氏(丹波第三組法傳寺)
- ・伏見別院 十一月五日 講師・木名瀬勝氏(名古屋教区駐在教導)

## 京都教区教化レポート

### 【京都教区児童教化連盟】

京都教区児童教化連盟では、子ども達と朋ともに遊びや体験を通じて親鸞聖人や真宗の教えを親しく感じてもらうことを目標に活動しています。

私たちの最も大きな活動が毎年三月の下旬に行われている「春の子ども本山参り」です。御本山を中心とした様々な催しで、子ども達に御本山とそこに関わった多くの人たちの願いを感じ取ってもらえる様にスタッフ一同が知恵を絞って企画しております。昨年は蓮如上人のご命日にちなみ、蓮如上人の御生涯をテーマとしたスタンプリーを実施いたしました。

また、子ども会等で人形劇の公演をいたしております。今年度は人形劇の演目をさらに増やせるように様々に話し合っております。他にも教区事業の「児童大会」への協力、「子ども会サポート事業」と連携しての寺院子ども会の支援を行っております。子ども会やそこに関わる活動をしていきたい方の参加をいつでもお待ちしております。

(京都教区児童教化連盟委員長 小早川 渉)

## 事務連絡

### 《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

〔届出順〕

近江第十組 紫雲寺前住職 瀧津 昭

二〇一六年八月二十五日 八十八歳

山城第一組 東光寺住職 藤澤 善夫

二〇一六年十一月十日 六十歳

近江第二十六組 最勝寺前住職 山田 俊明

二〇一六年十一月四日 七十七歳

〔敬称略〕

### 《第三回門徒戸数調査について》

宗門の財政基盤の確保及び効果的な教化施策の展開を可能ならしめるため、来る二〇一七年二月一日に、第三回門徒戸数調査が実施されます。

調査票は二〇一七年一月十八日に、本山より各寺院・教会へ直接送付されます。なお、記入いただきました調査票は、二〇一七年二月十五日までに組調査委員会へご提出ください。

また、今回調査いたしました結果を懇志金等の勧募又は教化施策展開のために使用することにつきましては、「門徒戸数調査に関する条例」第九条第一項の規定により、

二〇一六年度教区会及び教区門徒会(通常会)にて可決しておりますので、ご承知おきください。

### 《願事礼金改定のお知らせ》

二〇一七年一月一日より、願事礼金の改定をいたします。

改定内容の詳細につきましては、各組組会・組門徒会にて配布いたしました『京都教区通信』八十七頁〜九十頁に記載しておりますので、ご参照ください。

### 《東本願寺出版刊行物のお知らせ》

法話CD『本願に生きた念仏者』<sup>⑮</sup>  
「顕浄土」の教学

宗門の近代教学の礎を築いた諸師の法話のCD化第十五弾。



著者 広瀬 泉  
価格 一九四四円  
(税込)

### 《事務休暇のお知らせ》

教務所員研修のため、一月二十三日(月)は事務休暇とさせていただきます。ご承知おきください。

■ 京都教区教化テーマ ■

今のいのちがあなたを生きている  
 命に感謝のいのちの声 感謝のいのちのねぐら

◆ 教区事業予定

1月13日(金)	13:30~17:00	出版小委員会	会場◇教区会館3F	会議室
1月16日(月)	13:30~	第14期伝道研修会	会場◇教区会館2F	大講堂
1月17日(火)	~16:00	〃	会場◇教区会館2F	大講堂
1月20日(金)	13:00~17:00	青少年研修小委員会	会場◇教区会館2F	大講堂
1月30日(月)	13:00~17:00	参事会常任委員会	会場◇教区会館2F	大講堂

◆ 地区・団体事業予定

1月11日(水)	9:00~16:00	坊守会真宗基礎講座	会場◇教区会館2F	大講堂
	18:00~20:00	准堂衆会声明会	会場◇教区会館3F	研修室
1月13日(金)	13:00~18:00	教区合唱団	会場◇教区会館2F	大講堂
1月17日(火)	13:00~16:00	推進員協議会代表者会議	会場◇となみ詰所	
1月20日(金)	18:30~20:30	仏教青年会	会場◇教区会館3F	会議室
1月25日(水)	18:00~20:00	准堂衆会声明会	会場◇教区会館3F	研修室
1月26日(木)	13:00~17:00	靖国問題学習会公開学習会	会場◇教区会館2F	大講堂
1月27日(金)	14:00~17:00	児童教化連盟	会場◇教区会館3F	会議室
1月30日(月)	9:30~16:30	坊守会	会場◇教区会館3F	研修室

「教区だより」第338号

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

発行日 2017(平成29)年1月1日  
 発行人 錦 秀見(真宗大谷派京都教務所長)  
 発行所 真宗大谷派京都教務所  
 〒600-8164  
 京都市下京区花屋町通烏丸西入  
 Tel: 075(351)5260  
 Fax: 075(351)5256  
 メールアドレス: kyoto@higashihonganji.or.jp  
 ホームページ: http://www.k-kyoku.net/

印刷所 (有) 寶印刷工業所

the editor's note

編集後記

最近、著名人の乳癌のニュースをよく聞く気がする。私の母は四十数年前に患ったが、早期発見、根こそぎ切除を決断し今も元気である。勿論、状況にもよるうが、女性として手術を躊躇う方も多いらしい。ウチの場合、どのような心境であったのか、まだ面と向かって尋ねたことがない▼見知った方の訃報に接すると一瞬思い出すものの、私は、今がある尊さをホント無駄に過ごしている。母は居て当然という心持ちになってしまっている。もう新年。毎年、性根を入れ替えねばとは思っているが… (編集委員・横田 典)